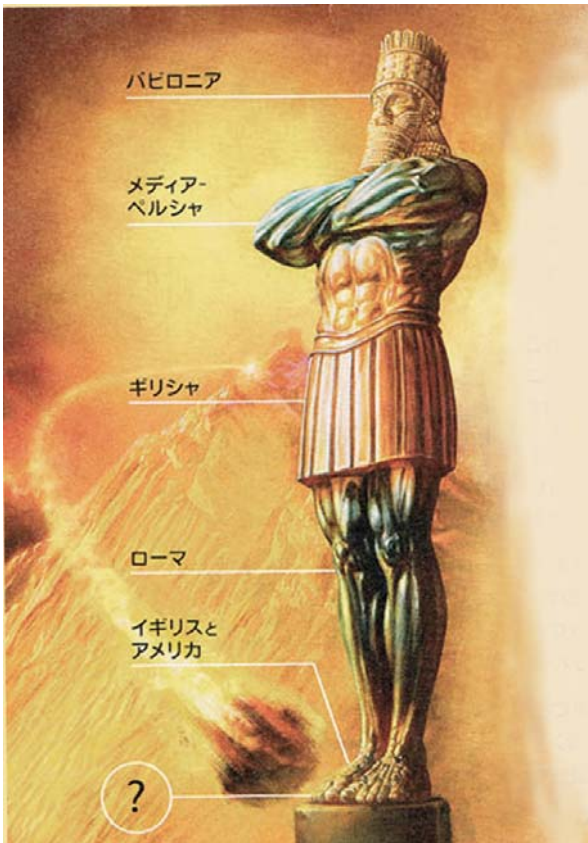


緊急レポートー ものみの塔教理崩壊間近！

ものみの塔は、身近にあるもの、身の回りの出来事を片っ端から、聖書預言に当てはめて「預言の成就」にして来ましたので、まだ成就していない預言は大患難とハルマゲドンを除いて何も残っていません。

ほとんどはとっくの昔に過去の出来事です。

今はただ「終わりは近い。終わりは近い。終わりは近い。終わりは近い。終わりは近い。・・・」と呪文のように繰り返すつづやき続けるだけの日々です。



左の挿絵は 2011 年のエホバ証人の大会に際して配られた期待を抱かせるパンフレットの一部です。「足先」が「イギリスとアメリカ」であり「指」の部分が現代であり、何を表しているかを期待させたようですが、これといった特別な事は何も扱われませんでした。これまでのように「英米」という表記は止めたのでしょうか。

それはともかく、改めてどうしてこの足の部分が「イギリスとアメリカ」なのでしょう。

この教理が創られたとき、ローマとのつながりのある国はどこも世界強国ではありませんでした。

終わりの日（1914 年当時）に存在してるはずの 7 番目の世界強国と言えるものは実際に存在していませんでした。

英国は、ローマとの関わりで欠かせない存在です

が、世界強国ではない。アメリカは預言のローマとは何の関係もない。そこで苦肉の策としてそれぞれの必須な不足を補い合って、2 重の国からなる「英米第七世界強国」なる者が創り出されました。

さて、その英国がローマの後継者であるという根拠について、ものみの塔の書籍はこう述べています。

*** ダ 第 9 章 140 ページ 22 節 世界を支配するのはだれか ***

「英国の優越性は、西暦 1815 年にフランスのナポレオンを粉碎して得た勝利によって確実なものとなされました。そのように英国が『辱めた三人の王』とは、スペインとオランダとフランスでした。（ダニエル 7:24）結果として英国は世界最大の商業国および植民地国となりました。そうです、「小さな」角は成長して世界強国になったのです。」

*** 洞 - 264 ページ 像 ***

「ギリシャの支配は分裂した形を取りながらも続き、最終的には新興勢力のローマに吸収されました。」

歴史によれば、ローマ帝国はゲルマン民族の神聖ローマ帝国という形で生き延びましたが、最終的に、かつては帝国に従属していた国、つまり英国という新興勢力の前に屈しました。英国と米国は密接な関係を保ち、全般的に行動を共にするため、今日では英米世界強国と呼ばれることが少なくありません。それは世界史における現在の主要な強国です。」

覇権国（世界強国）の栄枯盛衰の歴史を簡単に見ると、16世紀から17世紀にかけて、ポルトガル、スペイン、オランダなどが覇権国でした。英国は確かに18世紀の植民地争奪戦の末、全大陸の四分の一を占めたという広大な植民地を得るに至って、間違いなく覇権国でした。しかし次第に情勢は変わり、第一次世界大戦後、第二次世界大戦を経て、米国が覇権国としての時代を確立し、強大な軍事力と経済力を誇り、益々「超大国」となってきました。

ものみの塔によれば、1815年頃に英国は「世界強国」になったとされています。

では、その前は、「世界強国」はどうなっていたのでしょうか。

そもそも、ネスカドネザルの巨像はいつ完成したのでしょうか。少なくとも、1815年までは、足先は完成していなかったということでしょう。

そしてこの中途半端な状態で、古代ローマ帝国が覇権国ではなくなった時から歴史は、ずっとこのままであったということです。

当然、未完成ですから、その足先をめがけて飛んでくる「岩」も「山」も存在しません。

ここに、英国がそしてそれと組みするアメリカがその像を完成する足先だとして千数百年ぶりに描き足されるのですが、それが実は勘違いで、英米はその「足」ではなかったという事がはっきりした時点で、消しゴムで消され、再び元の状態に戻り、改めて「足」となる覇権国を将来に待たねばならないということになるのです。

覇権国の栄枯盛衰は終わってアメリカでそのままずっと続いていれば、めでたしめでたしだったのですが、時勢は変わろうとしています。

私は数年前からこのアメリカ没落が、ものみの塔のほとんど全教理の間違いを露呈し証明してしまうことになるかと繰り返し伝えてきました。

このブログにも「04 アメリカ合衆国は信仰の基盤？」という記事でアツプしてあります。

しかし、この期に及んで、いよいよアメリカ没落の様相が明確になりつつ

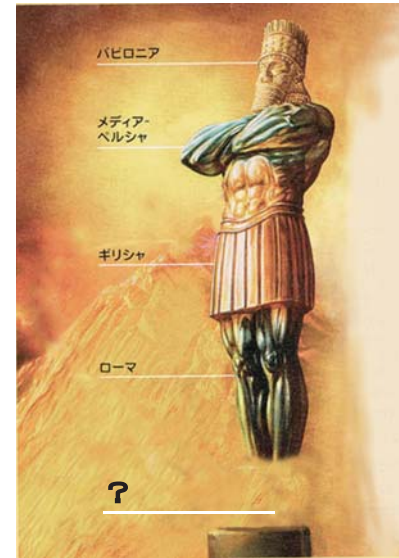
あるようなので、ここに「緊急レポート」として、改めて警告を発することにしました。

今現在ですら、すでに、アメリカを覇権国と見なす識者や国家はいなくなりつつあります。

今や、多くの人々の関心は「次の覇権国はどこか」ということに目が移りつつあります。

アメリカが覇権国（世界強国）ではなくなるきっかけとして、具体的な出来事はやはり、デフォルト（債務不履行）が起きた時でしょう。分かり安い具体例をひとつ挙げれば米ドルが基軸通貨（世界通貨）ではなくなった時でしょう。これはごく近い将来現実となるでしょう。

1815年以前の像の状態



2012年現在も同様

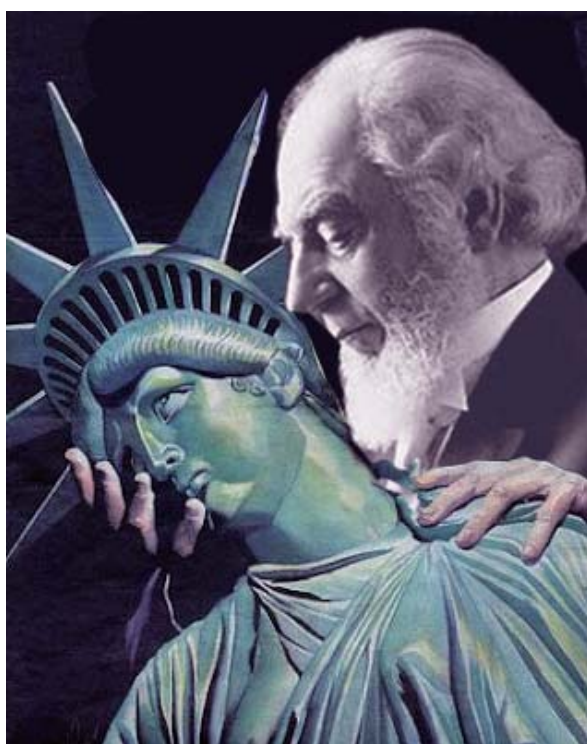
その時、英米は、第7番目の世界強国ではなかったということが証明されるということです。なぜなら、第七世界強国をその立場から除く者は他ならぬ「神の王国」ということになっているからです。

第七世界強国は終わりまで存続し、というより、その絶頂期に神の王国に滅ぼされなければならない事になっていますので、覇権国でなくなるどころか、衰退する事すらないはずなのです。その実体である第七世界強国が途中で不在の状態になるということは預言成就の上であり得ません。

ということは、アメリカが覇権国でなくなった時点で、第七世界強国は英米ではなかった事が証明され、未だ第6番目のままであり、すべては振り出しに戻るということです。

巨像の足に関して、或いはダニエル7章の第4番目の獣の10本の角に関して、1815年以前の状態と実は何も変わってはいなかったということが証明されるということです。

こんな事態は、ものみの塔にとって、あつてはならない全くの想定外であったのでしょう。



C. T. ラッセルが現代にも生きていたら、「こんな事になろうとは」と痛く嘆いたことでしょう。



未だ「世の終わり」のしるしは成就しておらず、終末時に起こるとされる預言は何一つ成就してはいないことは、全ての事実が物語っていますが、このアメリカ合衆国の存続に依存した教理体系は、誰にでも分かり安い、いやでも考えざるを得ない事態を招くことでしょう。

今のうちに「アメリカ没落は、イコールものみの塔の没落」であるという事をあらかじめ、多くのエホバの証人の方に知らせ、認める認めないは別にして”多少の心づもり”を残しておいてあげれば、実際にその時にパニックに陥ったりせずに済むよう助けられるかも知れません。

…それで今、それが起こる前にわたしはあなた方に告げました。実際に起こる時にあなた方が信じるためです。(ヨハネ 14:29)